

「仕事ができる社員、できない社員」という本からです

自分の頭で考えられる人 感覚だけで仕事をしている人の落とし穴

リーダーシップとは、「分析力」「常識力」、そして「判断力」の三つがそろっていることです。これは、アメリカの軍隊でもいわれていることですが、分析力を発揮したうえで、常識を持って判断することがリーダーには不可欠とされています。つまり、判断とは当たり前の常識に基づいて行うものであって、特殊な知識や感覚は特に必要ないということなのです。しかし、よくよく考えてみれば、私たちの生活は、朝起きて夜寝るまで、「判断→実行」することの連続ではないでしょうか。朝起きて、歯を磨き、トイレへ行って、朝食を食べて、駅まで歩いて、電車に乗って会社に行くといったいつもの行動は、無意識のうちに行われているようですが、実際にはそれぞれに対して判断が下されています。しかし、すでにルーチン化されている行為であるため、人はそれを意識しません。いい換えるならルーチン化とは、前項でも述べた「反省会」を何度も行った結果なのです。ルーチン化されたことはスムーズに早く済みますが、それは何度も繰り返してきたことであり、どうやるのが最善かがすでにわかっているため、一切「判断」をしなくて済むようになった結果なのです。フランス人である私の妻に「何を食いたい？」と聞かれて「ソバかな」と答えると、妻は「なんで？」と理由を尋ねてきます。昨晩はちょっとヘビーな夕食だったから胃がもたれているのだと説明すると、「じゃあ、そうしよう」と納得します。このように、本当ならどんな場合でも感覚的に物事を判断するのではなく、常に自分で一つひとつの物事を考え、判断しながら進めていかなければなりません。

もちろん、世間一般でいわれるように、経験を積めばスムーズに判断できるようにはなりますが、前例主義になりすぎると、状況が変わっても前例にこだわって失敗することがあります。たとえば、オフィスの廊下にゴミが落ちているのに気づいたら、上司であろうと当然拾うべきです。ただ、拾って終わりではなく、総務に電話して、「昼の一時ごろ、廊下にゴミが落ちていた。なぜあそこにゴミが落ちていたんだ」と問い詰めなければなりません。実際、私はそうした電話をしていました。すると総務から、「お昼前にパートさんが一度見回っています。次に見回るのは、パートさんが食事から帰った後の午後二時くらいです」といった答えが返ってきました。しかし考えてみれば、昼の休憩時間にこそ多くの人が歩き回るので、ゴミだって落ちる可能性が高いでしょう。それなら、午後1時の始業時間が始まるまで見回らせて、その後で昼食に行ってもらうのが一番、効率がいいはずですが、これを説明して、「何か反論があるならいえ」とうながしたところ、「いえ、おっしゃる通りです」というので、翌日からパートさんに1時10分まで見回らせるように決められました。こうして“前例”を見直すのも「反省会」の一つのやり方です。単にゴミを拾うだけではいけません。「あそこにゴミが落ちているぞ。拾っておけ」と指示するのも十分ではありません。その落ち方によほどの問題点があれば別ですが、そうでないなら、落ちているという事実だけでなく、ゴミが放置される状態を今後つくりたくないための対策まで考えようとする姿勢を持つのが重要です。

仕事ができる社員は、物事をロジカルに、自分の頭で考えるクセが身についています。「判断」は、ロジカルに考えることなしにできません。つまり、判断するクセをつければ、必然的にロジカルに物事を考えなくてはなりません。だから、すべていい方向へ進むのです。「どうしたい？」と聞くのではなく、どうするのか、自分で考えてください。もし周りと意見が合わなかったら、それが「なぜ」なのかを自分の頭で考えることです。これも一種の「反省会」です。この習慣を繰り返していけば、必ず有能なビジネスマンとしての資質を身につけることができます。

必ず有能なビジネスマンとしての資質を身につけることができるのは何をすると良いですか？

()